



『趣味(ジャズ)についての一考』

加増区 小宮山 勝彦



うものを探して人生の友にして。と言われたのです。

二十代のころ、よくラジオで音楽を聴いていました。アメリカのポピュラーミュージックで、そこに突然ジャズが流れてきたその音に、「なんじゃこりや！」と思いました。

一九六〇年代、ジャズ喫茶という独特の雰囲気を持つ店があり、タバコの煙ももう大音量で突き刺さってくるようなトランペットの音。それは私の全てを開放し、自由にしてくれる音でした。

私は、たくさんのジャズを聴き、そしてジャズのLPを少しずつ集め、レコードを聴きながらジャケッとをみるのは得がたい喜びとなっていました。なかでも五・六十年代の黒人ジャズを好きになり、何か私を突き動かす力がありました。

「ジャズは読むものでもあっていいのだ」私は勝手にそのような旗を上げ、ジャズに関する書籍もたくさん読み、

コレクションにしました。こうしたことが私自身の日々の生活の指針・軸を形作ったように思われます。

思うのはあの先輩との山の宿での語りです。すでに先輩は八十代になっていて、今趣味について話したら、時代の風潮は変わったが、やっぱり同じことを言うだろうと想像し、私もよかつたなとつくづく思います。

最近の私はパソコンを使用してLPをCD化しています。ずーっとジャズを聴きたいからです。高齢化したらレコードに確実に針を落とせなくなるのではないか。そんな思いもあつてほちほちと頑張っているのです。

若い頃からずーっと共に歩むことができたジャズという音楽に感謝です。そして、何といつてもあの先輩にこそ感謝です。



川柳浅間吟社

- ひとことで遅れの部屋の座が和む 中山 紀子
- 迷い捨て信じる風に乗って見る 桜井 眞紗子
- 決め手ない迷いを消した青い空 掛川 たゆ子
- みな同じ丸い地球を話し合う 土屋 正示
- 幸せは今かな箸を揃えてる 荻原 栄子
- どの部屋も空気が温い家族の和 小林 峰男



小諸短歌会

- 沿線のみどり豊かに続く中 新保 栄子
- 枯赤松の赤々と見ゆ 新保 栄子
- 男女子どもも混じりて踊る 篠原 昭枝
- 小諸ドカンシヨ雨も上がりて 篠原 昭枝
- 食べ頃の玉蜀黍を夜毎来て 佐藤 初子
- 喰い千切りゆく憎きけだもの わがあなた凡て忘れし身軽さにも 山口 夏み子
- わが名呼びたり熱く答えぬ わが名呼びたり熱く答えぬ 山口 夏み子
- この町の新庁舎出来嬉しかり 畑 忠房
- 人に寄り添うサービス望む 畑 忠房
- 湯につかる孫を支ぶる娘のしぐさ 友野 喜子
- 初々しくも母の面差し 友野 喜子